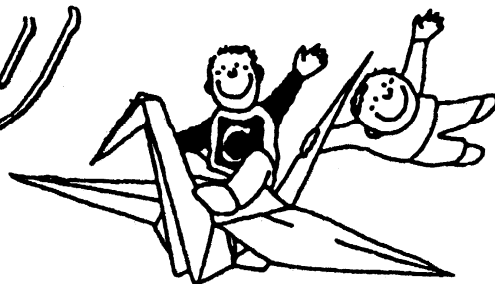


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



チェルノブイリ事故27周年の集い

フクシマとチェルノブイリを結んで

～フクシマを核時代の終わりの始まりに！～

日時:4月14日(日)13時半～

場所:大阪市立総合生涯学習センター・第1 研修室

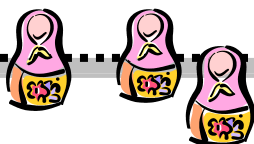
(梅田第2ビル／5階 下記地図参照)

* フクシマ事故から2年を経た飯館村からの報告

ゲスト:佐藤健太さん(負けねど飯館!! 常任理事)

* WHO (世界保健機構) によるフクシマ事故の「健康リスク評価」報告の批判
報告:「救援関西」事務局

☆ベラルーシ民芸品などの救援バザーもあります!



主催:チェルノブイリ・ヒバクシ救援関西

問い合わせ:cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

072-253-4644



フクシマ事故から2年が経ちます。しかし未だに事故は収束せず原因も解明されていません。事故処理のために2万人を越える労働者が動員され、高い放射線量のもとでの必死の作業が続けられています。16万人もの人々が高濃度の放射能汚染地からの避難生活を強いられ、400万人もの人々が放射線管理区域相当の汚染された場所で放射能と向き合う生活を強いられています。放射能により汚染された自然や大地、奪われた社会生活は容易には元に戻りません。大震災からの復興の掛け声の一方で、政府は原発推進のために、「事故による被ばくの健康被害はたいしたことはない」と宣伝し、マスコミもフクシマの現状をあまり伝えようとしていない中で早くもフクシマ事故の「風化」が懸念されます。

集いでは、福島県飯舘村から福島市に避難している佐藤さんに来ていただき、若い世代からみたフクシマの現状と今後の生活への思いなど、お聞きしたいと思います。

またWHOは昨年、福島事故の「予備的線量推定」報告を出し、引き続き今年2月末には「健康リスク」報告を発表しました。これまでWHOは内部で見解の相違を抱えながらも、公には原発推進のIAEA（国際原子力機関）などとともに、チェルノブイリの健康影響を過小評価する報告を行ってきました。日本政府はWHOなど国際機関の見解をバックに、フクシマ事故被害の切り捨てを目論んでいます。フクシマでも、被ばく健康被害の過小評価を許してはなりません。

今年もチェルノブイリとフクシマを結び、支援と連帯を広げるために、集い、話し合いたいと思います。ぜひご参加下さい！

佐藤健太さん・プロフィール

飯舘村で生まれ育つ（1982年生まれ）。事故前から、子どもたちの世話役として村の行事などにも積極的に参加。2011年3月11日の震災と東京電力福島第一原発事故後、村が放射能で高濃度に汚染されたことを知り、子どもや若者を早急に避難させるよう求めてTwitter等で訴えかけ続けた。同年4月末、「計画的避難」開始前に、村の若者と年輩者が協力して立ち上げた「負けねど飯舘!!」の発足にかかわった。村民の将来の健康や生活を守るためにも、事故後の行動や健康・生活の記録を残そうと「健康生活手帳」の作成にも尽力。この二年間、全国各地で、さらに昨年はブラジルで開催された「地球サミット」（リオ+20）でも飯舘村と福島の現状を訴えてきた。

「負けねど飯舘!!」の常任理事。飯舘村商工会青年部副部長。福島県商工会青年部連合会理事。



～フクシマと関西を結んで～「食と農業と原発を考える」

2月24日、宝塚市立男女共同参画センターで、「～フクシマと関西を結んで～食と農業と原発を考える」報告・討論集会を「原発の危険性を考える宝塚の会」、「若狭連帯行動ネットワーク」、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の共催で開催しました。当日の午前中は、渡邊さんも一緒に「コープ・ワーカーズかんさい」の高木さんの案内で菜の花畑を見学。まだ時期的に早く、残念ながら菜の花は見ることはできませんでしたが、自分たちで自分たちの仕事を作って働くという事を実践されている姿勢に共感しました。宝塚と境界を接しているその地は吹田の住宅地のど真ん中に在ることも驚きでした。

午後の集会は会場が一杯になり、椅子を追加するほどでした。福島から来られた「カーちゃんのカ・プロジェクト」協議会代表・渡邊とみ子さんは「福島で生き・福島で育み・福島から繋いで行くという事」、福井から来られた「森と暮らすどんぐり倶楽部」代表取締役松下照幸さんは「廃炉に向けて一立地地域と都市部の連携」のタイトルでそれぞれに想い語ってくださいました。やはり福井から来られた石地さんは大飯原発再稼働後の福井の様子や若い人も運動に参加してきていることなどを報告してくださいました。

また渡邊さんから送っていただいた、丹精込めて作った自慢のじゃがいもやかぼちゃに万感の想いを込めて作った「カーちゃんのカ・プロジェクト」作のクッキー・マドレーヌやスープ、豆菓子なども沢山売れました。



～フクシマと関西を結んで～「食と農業と原発を考える」

原発の危険性を考える宝塚の会 井上保子

私は筆が遅い方でもないし、依頼を受けたらなるべく早く原稿を寄せるようにしている。なぜこんなに書けないのだろうと今回は悩んだ。飯舘村を放射能によって追われた渡邊とみ子さん、福井で長く反原発運動を続けておられる松下照幸さんの話が、私にとっては身につまされるほど重いもので、どう書けばよいのかわからずに時間だけが経った。

生産者が生産地を奪われること、これが一番の痛手になることはどんな場合でも同じだと思う。だからこそ生産者に向かっても「放射能のことから目をそむけないで」と言い続けてきたのだが、実際に福島原発事故が起こりすべてを置いて土地を離れなければならなかった人たちの生の声は、聞くほどに重みを増し避難のつらさがしのばれる。

なかでも、種を継ごうとして福島市内の避難地においても畑作を続けて、収穫した後の話がこたえた。収穫したもののそれを保存する場所がなかったと。農家であれば家屋敷の他に農機具や農作物を保管する納屋があるのに、それがなければたちまち保管に困ってしまう。保管するためのコンテナを購入して設置したら、ご近所から景観が悪いのでどけてくれという要望が来たという。仮設住宅や避難者はそこに在ること、居ること自体が非日常であるのだが、その土地に住む人にとってはしよせん「間借りさせてあげている」対象で

しかない。そういったことが住民の間に少しずつ澱となってたまっていくのだと思う。阪神淡路大震災の時となんら変わりはないのだなと、いたたまれなくなった。居たくていられるわけでもないのに、できることなら帰りたいのにそれがかなわない。追い打ちをかけるような言葉は他にも多くあるだろう。それでも「あきらめるわけにはいかない」と立ち上がった渡邊さんたちを、私たちはどのように支えていくことができるだろうか。



宝塚市の学校給食の放射能検査を行うために、測定機械の導入の働きかけを行った際、私は繰り返し強く言った。「自分たちがこうやって食べものを測るのは、福島原発事故があったから。そして影響は何十年も続く。フクシマを忘れないために測ることを覚えておいてほしい」と。そしてフクシマをなかったことにしてはいけなと繰り返し話している。

消費者はある意味とても勝手だ。生産者がいなくなれば食べものがなくなるという危機感がない。福島県は米の生産が全国で第4位だったのだ、ということも話す。そして福島の人たちが置かれている今の状態を考えてほしいと訴えているが、実際は情報に流されている人が多い。何を選んだらよいかわからない、何が正しいのかわからないという。消費者はもっと考えて「悩まなければいけない」のだと思う。でないと、お金をかけて測っている生産者の気持ちがわからないのではないだろうか。測っていても売れない、という状況が一番それを物語っていると思う。食べる、食べないは自由だけれど、その後ろには生産者がいるということを忘れてはほしくない。測定というのは生産者を守るものでもあるのだ。

田畑が生活そのもの、糧を得る場である農家の方たちの「暮らし」を知る都市部生活者がどれほどいるだろうか。しがらみや「藩制」のことが日常で語られる東北を、私たちはどこまで理解できるだろう。それでも私は歩み寄りたいと思う。食べものの不安も、先が見えない暮らしも解決するにはかなり大変なことばかりだけれど、時間がかかっても分かり合える努力をするべきだ。渡邊さんたちの活動をどう支えていくのか、まだ何も答えはないのだけれど私たちにとっても試練なのだと、話を聞いていてそう考えた。

また、美浜から来られた松下さんの話も現地での葛藤を思うとやりきれない。自然が豊かであればあるほど住んでいる人は少なく、原発立地に狙われる。自然に目を向けたらこんなに財産があるのだと、松下さんたちは実際にいろんなプログラムを組んでいるのだけれど、まだまだ広く宣伝できていないところが残念だ。これからは宣伝の仕方かな、とちょっと考えた。私たちに突き付けられるのは、原発を停めたところでそこに残る膨大なごみのかたまりのこと。使った人が引き取ってよ、と言われたら本当は断れないのだけれど。

いままでも何度も繰り返されてきた(ただし、私たちの間ではの話)議論を、国全体でするように仕向けていくのが、電気を使ってきた私たちの責任だろうか。何もかも先送りにして現実に行っていることを見ないふりをしている国を、どうしても振り向かさなければいけないのだと思う。現実的には「わからない、よく知らない」と言っている人たちといかに話をしていくか、ではないだろうか。フクシマが起こっても変わろうとしない、変わりがたくない人たちが多いこの国において、一番厄介なこの「隣人」たちに根気よく語り続けるしか方法はないような気がする。

私たちは、NPO法人「新エネルギーをすすめる宝塚の会」で市民発電所の事業も行っているけれど、原発とは少しでも早く縁を切りたいという思いが根底にあることが、強い気持ちとなっていることには間違いない。もうこれ以上、苦しむ人たちを増やしてはならないのだと、お二人の話を聞いてさらに思いを強くした

もっと もっと 伝えましょう！

2013年2月24日(日)宝塚市立男女共同参画センターにて、「フクシマと関西を結んで～食と農業と原発を考える～」講演・交流会に参加させて頂き、ありがとうございます。

飯館村で被災し福島市に避難されておられる「カーちゃんのカ・プロジェクト」協議会代表、渡邊とみ子さんの美しい飯館村存続・自立の為の地域づくり活動におけるオリジナルじゃがいも「イーダテベイク」と、かぼちゃ「いいだて雪っ娘」品種登録の夢、目標実現に向けての活動が実り、世に出る矢先に原発事故で一瞬に全てを奪われた話には涙が流れてなりませんでした。

また、福井県美浜町から原発立地県でありながら原発に反対し原発推進派の圧力を多々受けながらも、原発のない町づくり実現の為に原発に依存しない町づくりを町民とともに運動されている松下照幸さんや石地優さんの活動に対して、関西電力を利用する私の心は苦しくて悲しくて、目には涙があふれていました。



私が子どもの頃に、両親や祖父母から聞かされた、私の知らない戦争での様々な体験と同様な事が今、形を変えて起きているように思えます。大和の美しい景色を、あの忌まわしい戦争で失いかけ、原子爆弾により被爆国民になり、国はどん底、終戦となったあの苦しく悲しい日を時の流れとともに忘れてはなりません。

今、また原発推進的な方向になりつつあるような気がします。より一層原発反対運動を広めることが大切だと思います。

「脱原発」をモットーに、即時廃炉実現の為に、私は、この地震列島であるがゆえ、原発の危険を痛感して頂けるように、勉強させていただいた事を、無関心に過ごしている私の周りの人々に知らせながら、後世に本当の美しい日本を残す為、皆様方とご一緒させていただきます。そして物で栄えて、心で滅ぶ事なく強く生きていきたいです。

私の友人の九十二才の母親が言っていました。「戦争で焼け野原になり、父を失い、母と兄弟4人必死に生きる事を考えましたよ。国の手助けなどは無く、自分達で知恵を絞り互いに助け合いながら自立しました。」彼女の言葉に「そうです！！」私たちの今は、様々な歴史上の日々の上で、平和に生かされているのだと痛感しています。

もっと もっと 伝えましょう
つよく つよく 伝えましょう
しっかり しっかり 伝えましょう
脱原発でグローバルピース を

東野初子

2012年 ベラルーシ被災地訪問報告-その2

振津かつみ

クラスノポーリエ訪問～続編

2012年12月のベラルーシ訪問のうち、前号(89号)に掲載できなかったクラスのポーリエの訪問先での話しについて、ご報告します。

ソヌチカ幼稚園

幼稚園の庭は雪で真っ白に覆われていました。冬の間、子どもたちは屋内で過ごすことが多くなり、先生たちは部屋の温度管理にも気を使っています。今年は夏休みの間に、窓が久々に新調され、三層のガラス窓（空気の層が間にある）になり、「今年の冬は暖くなるわ」と、先生たちも嬉しそうでした。ソヌチカ幼稚園には、今回、日本の皆さんのカンパで、先生方の要望に応じて掃除機を2台購入して贈呈しました。



子どもたちは、新年に親達を招いて開催する「お遊戯会」の出し物の歌と踊りの練習に励んでいました。私たちにも、その愛らしい歌と踊りを披露してくれました。

子どもたちの最近の健康状態について、園長先生にお聞きしました。「毎月、四半期、年ごとの子どもの健康状態を表す指標（100人中何人病気かという人数）を記録しています。その値は以前よりもよくなってきています。免疫力も上がってきているように思います。今年は、一回も病気にならなかった子どもたちが75%でした。一方で、食生活の変化のためか、アレルギーの子どもが増えているように思います。」とのこと。小児科医のベーラさんも「最近、薬剤アレルギーの子どもも増えているのよ。」と、言われていました。



ソヌチカ幼稚園長のエレナ・グローモバ先生は、まだ若い（33歳だそうです）、素敵な女性です。ロシア生まれですが、両親の仕事の関係で子どもの頃にクラスノポーリエに引っ越してきたそうです。事故の時は9歳で、事故当時のことを覚えているとのこと。両親は放射能のことには無関心だったようで、子どもたちも外で遊んでいたそうです。母親は、「帽子をか

ぶっていれば大丈夫よ」と言っていました、子どもながらに「何かが起こっている」という雰囲気を感じていたそうです。5月15日になって初めて事故についての情報が人々に知らされ、18歳以下の子どもたちは全員避難させられました。医師や教師が、住民に事故による汚染と放射能の危険性を説明をしたそうです。エレナさんは、先生からは「森には行ってはいけない」と言われていましたが、森に行ってしまったことがあったそうで、その時、頭が痛い、すぐ眠たくなるなどの症状があった覚えがあるとのこと。それから、5年間は森にはいかなかったそうです。



向かって一番左が園長のエレナさん

18年前、17歳の時から4年間、クラスノポリエ地区の農村部にあるヴィドレンカ村というセシウム137の汚染レベルが40キュリー／km²以上（148万ベクレル／m²以上）の高汚染地域の学校で仕事をしていたそうです。毎日35kmを、自宅のあるクラスノポリエ市からバスで通っていました。当時、ヴィドレンカ村の小学校には16-20人くらいの生徒が通っていて、先生はエレナさんを含め二人だけ。木材加工工場のあったヴィドレンカ村の人々は、高汚染地域で政府からは「移住すべき」と言われたにもかかわらず、移住を断って住み続けている村民が100～150人くらい残っていたそうです。高齢者が多かったとのことですが、子どもたちのいる家庭もあって、学校は続けざるをえなかったようです。

クラスノポリエ区長さんを表敬訪問

前年（2011年）と同様に、区長さんの表敬訪問をしました。区長さんのお話の内容は次のようなものでした。

「私たちは長年にわたって汚染地域で暮らして来ました。（区長さんは北隣のチェリコフ地区の出身。）その経験がフクシマ事故後の日本の皆さんのお役にたつのであれば嬉しいと思います。大切なのは人々の健康です。事前に連絡をもらえれば、フクシマからの訪問団も受けいれます。希望があれば、いろんな施設などの見学も許可を出しましょう。今後の世代にわたって私たちの友情が永遠に続くことを願っています。」

「私たちも事故直後には、放射能とどう向き合ったらいいか知らなかったのも、とても苦しみました。その中で、市民を支援する国家プログラムが次第にできてきました。経験不足のため、多くの間違いもありました。26年経った今も、全て解決しているわけではありません。常にこれまでの欠陥や弱点を見直しながら進んでいるのです。例えば、衛生局での放射能測定や管理体制は、事故後すぐにできたわけではありません。専門家のアドバイスなどもあり、健康、生活、労働を守る法律が徐々に整えられて

きました。」

「森で仕事をする猟師は、野生の動物を捕り、森の木の実やきのこを採って暮らしていますが、狩猟や採取したものの放射能を測定し、高いものは処分しなければなりません。しかし一般の人々は禁止しても野生の動植物をとってしまうのです。地域の人々の健康は、個人的問題ではないので、禁を破ってしまった場合には罰金が課せられます。森の汚染問題は社会問題だと考えられているのです。」「農業については、汚染の低いところ(基本的に15キュリー／km²=55万5千ベクレル／m²未満の汚染レベル)でのみ行っています。どのような肥料にすれば作物の放射能が少なくなるか、いろいろと実験も行っています。」

「地域の経済問題は深刻です。事故の数年後から現在に至るまで、熟練労働者の人材が不足しています。特に、子どものいる人は汚染地には住みたがらないので、自分で移住した人もいます。強制移住地域から家を失って大都市に移った人もいます。大都市の方が子どもの教育にも都合がよいですし、設備の整った大きな病院もあり、より充実した医療を受けるチャンスがあるので、そのような選択をする人々もいます。」



「森林の利用のために国や民企業の投資がなされています。私としては、木材を利用する事業は、見込みのある産業のひとつと考えています。また個人的には、クラスノポリエ独自のユニークなビジネスの計画も考えています。そのひとつは、人口湖を作って、さけの養殖をやりたいということです。また、藁をペレットにして燃料に用いるプロジェクトも実験的にやりたいと考えています。」と、「経済学」が専門という区長さんは、な

んとかクラスノポリエの経済復興を進めたいと、いろいろと構想をめぐらせているようでした。最後に、「チェルノブイリとフクシマは、類似性のある不幸な事件です。私たちは、このような不幸を乗り越え、地球の平和を実現することを心から願っています。」と言われました。

元教師だった副区長との会談

クラスノポリエの副区長さんは、体格のいい女性で、元教師だった方です。区長さんとの話し合いの後、別の部屋でお茶を頂きながら副区長さんのお話をうかがいました。副区長さんのお話の内容は、次のようなものでした。

「私は、人材不足というより、むしろ物的被害が大きかったと思います。事故前に多額の投資をして整備した汚染地の病院や学校が全く使えなくなっていました。また、汚染したそれらの建物を壊して埋めるために、特別の『組織』を新たに作らねばならず、その運営にも資金が必要でした。」「事故後

3年経った1989年から1990年にかけて、40キュリー／km²以上の地域から移住が行われました。しかし、全ての地域が同時に移住できたわけではありません。医学的、経済的、あるいは精神的な側面も考慮し、環境放射能レベルも測定して、総合的に影響を分析した上で移住を決めたのです。判断を下すのには時間がかかりました。当時は情報もほとんどなかったですし、それに住民たち中には、自分たちの地域が汚染していることを信じたくない、移住したくない人々も沢山いたのです。私たち素人には40キュリー／km²以上という汚染がどれだけ危険なのかどうか、判断できませんでした。専門の学者達の結論を待つしかありませんでした。」「5年経って、第二段階として、15～40キュリー／km²の汚染地域からの移住が始まりました。また、住民の希望に応じて15キュリー／km²以下でも移住ができるようになりました。40キュリー／km²以上の強制移住地域の人々は、住居を与えられ、移住費用と4ヶ月分の給料が支給されました。15キュリー／km²未満の『移住の権利』地域では、基本的には『自分で解決しなさい』という政策で、非汚染地域に新しい家を提供されました。しかし、実際には仕事などを変えることは容易ではなく、多くの場合『移住』は決して簡単なことではありませんでした。」

「高汚染地域から3～5年後になって移住したのは、主に経済的理由だったと思います。移住するまでに行われた土地の除染、家畜に汚染していないエサをやる、住民のために汚染していない食べ物を持ってくるなど、様々な方法を試みましたが、あまり効果もみられず、仕方なく移住をしたのです。」「農業ができなくなった土地には木を植えました。また、表層5～20センチを削り取って、居住地から離れた森の中に『処分場』を作って集めました。その場所には標識が立てられ、知らない人が偶然に立ち入ったりしないように立ち入り禁止にしました。」「一方、政府は、物理、農業、医学などの専門家を集めて『チェルノブイリ委員会』を組織しました。そして土地、水、植物、農業、人々の健康、等々の問題に関しての国家プログラムができたのです。それまでの事故後5年頃までは、ほんとうに混乱した状態でした。移住すべきかどうかははっきりせず、人々はパニック状態に陥っていました。私は、高汚染地での農業を禁止したことは正しかったと思いますが、しかし事故後3年も経って、人々を移住させたことが正しかったかどうか…。人々のストレス、ライフスタイルの変化など、移住に伴う様々な要因を考慮しなければならないと思います。」

「ベラルーシでは、甲状腺癌はたしかに増えましたが、検診をやって早期に診断し、治療もし、人々は生きて働くことができました。率直に言って、私たちにとって今や、チェルノブイリの問題は『第一の優先課題』ではないのです。人々はすでに、きのこ、森の木の実などの危険性を知っています。今では、チェルノブイリ以外の様々な困難な社会的、経済的問題が重要視されています。」

副区長さんは元教師で、事故後には、クラスノポリエ市から4kmくらい離れたノボエリノという高汚染地の学校で3年間働いていたそうです。副区長さん自身は、その村に住んでいたのではなく、クラスノポリエ市から通勤していたそうです。ノボエリノ村は400キュリー／km²（1,148万ベクレル／m²以上）の場所もあるほどの高汚染の村だったとのこと。当時、村には500人くらいの人々が暮らしており、学校の生徒数は300人くらいだったそうです。事故後の5月には子どもたちは全員避難し、5月末

から6月にかけて、兵士が屋根の取り替え、アスファルトで道路を覆うなどの除染作業を集中的に行ったそうです。しかし9月の新学期には子どもたちが戻ってきました。学校では、服を学校の中と外で着替えさせたり、道路や校庭をアスファルトで覆ったりという対策をしました。村には食べ物を他から運び、村の農地では作物を作らないように禁止したそうです。除染としては、土地の表層20センチをはぎ取ったり、特に屋根の下などの汚染の高い場所の土を除いたりしました。外での散歩などは制限されました。子どもたちは学校から、あるいは幼児は母親と一緒に、年に二回、汚染していない土地への保養へ送られました。この「保養」は汚染地区全体で今も続けられていますが、より汚染の高いところは年に2回、クラスノポリエ市内のように比較的汚染の低いところは今では年に1回になっています。このように高汚染地域であっても、原発周辺30km圏外では、事故後の数年間には、様々な「対策」をやって、できるだけ移住せずに残る努力がされたのだそうです。

事故が起こった時、副区長さんは妊娠中で、事故後1ヶ月と10日目に娘を出産したそうです。それだけに事故直後のことを鮮明に覚えているとのこと。事故直後に生まれた子どもさんも、無事に成長し、今は先生になり、孫もいると話してくれました。

私は、事故後二年を迎えようとしていた福島の状態と重ね合わせながら、区長さんと副区長さんのお話を聞きました。チェルノブイリとフクシマとでは、事故時の社会体制も人々の生活様式や地理的条件なども違いますので、単純に比較はできません。区長さん、副区長さんのお話からは、事故後、数年、5年と、被災国の政府も地域の行政担当者も、試行錯誤の中で進んできたことが伺えます。チェルノブイリでは、今の福島の「長期帰還困難区域」「居住制限区域」になっているような高汚染地にも3年以上も人々が住み続け、除染など様々な努力をしましたが、結果的には「経済的にも有効ではない」（費用対効果で割にあわない）という現実と直面し、移住に伴う人々への精神的影響などを考慮しつつも、やはり「移住」という選択をせざるをえなかった経緯がありました。一方、福島の被災地では、事故後、数日から数ヶ月の間に30km圏内や、30km圏外でも飯舘村などの高汚染地からの避難指示を出しました。しかし、事故後1年経って日本政府は「年間20ミリシーベルト以下の地域は帰還」という方針を打ち出しました。これはチェルノブイリ事故やフクシマ事故があっても原発推進を続けるIAEAの意向やICRP勧告にも沿う方針です。そして福島の高汚染地では今、チェルノブイリでは「経済的にも有効ではない」と判断された「除染」を国主導でやり始めています。チェルノブイリもフクシマも…どちらも矛盾に満ちています。いずれの場合も、事故前の環境や生活を取り戻すことは容易ではなく、世代を越えた汚染という課題を残しました。どのような方策を取るにしろ、基本におかれるべきは「被災住民の健康と命、生活を守ること」のはずなのですが…。悩みながらも、被災地住民自らがよく考え、話し合い、そのつど進むべき道を選択しながら進んでいくしかないでしょう。しかし、そのような議論のプロセスが、チェルノブイリでもフクシマでも、必ずしも保証されていないのが残念です。フクシマでは、このような被害をもたらした原発、それを進めた政府、電力会社、専門家、等々の責任をしっかりと問い、被曝の

低減と健康・生活保証を行わせると同時に、二度と繰り返させないよう、政府に脱原発と再生可能エネルギーへの政策転換を明確にさせてゆく運動を強めなければと思います。

子ども社会保護施設（プリユート）と障がいを持つ子どものためのリハビリセンター訪問

「子ども社会保護施設」（プリユート）を訪問しました。この施設は、アルコール依存や病気などの理由で、親が子どもたちを育てられない状況に陥った家庭の子どもたちを一時的に保護する施設です。子どもたちはプリユートで生活し、そこから学校や幼稚園にも通います。その間に、カウンセラーやケースワーカーのような役割の人々が、親の生活の立て直しを促したりして、子どもたちが家庭に戻るように支援します。それでも親が立ち

直れずに養育が難しいと判断された場合には、子どもたちは親戚に預けられたり、親は親権を停止されて「里親」に引き取られたりします。今回の訪問時にはちょうど5人の子どもが入所中でした。年齢は6～13歳で、3家族からの兄弟姉妹です。そのうち3人は、6ヶ月間、親の親権を停止するかどうか経過をみていところだそうです。案内して下さった所長さんの話しでは、ほとんどのケースで、親が養育放棄する原因は、アルコール依存症とのこと。施設の中は、とても明るい家庭的な雰囲気、勉強部屋、寝室、居間、食堂、親との面談室などが整えられていました。先生方の「手作りの暖かさ」が伝わってきます。施設では「国の予算だけでは十分な設備も整えられない」と、所長さんは嘆いておられました。



子ども障がい者センター長のナジェージダさん
「ここが図書室です。」と案内してくれた。

プリユートと同じ建物の中に、「障がいを持つ子どものためのリハビリセンター」があります。このセンターは、以前はクラスノポリエ市の別の幼稚園の建物の中でしたが、手狭だったため、このプリユートの建物に引っ越しをしてきたばかりでした。以前から懇意にしている所長のナジェージダさんが迎えてくれました。広い場所に移ったので、保健室、言語療法室、図書室なども整備したいと、まだ準備中の各部屋を案内してくれました。子どもたちはちょうどお昼寝の時間で、ベットの中で毛布にくるまりながら来訪した私たちの様子を見てい

ました。具体的なデータは聞けませんでした。ナ
ジェージダさんのお話によると、ここ数年、クラス
ノポーリエ地区の障がいを持つ子どもの数は減っ
てきているのだそうです。しかし、ここでも予算不
足に悩んでいて、食費とベッドなどは国の予算で購
入できましたが、家具やおもちゃはセカンドハンド
で安いものを探し、経費節約しながらなんとか運営
しているとのこと。先生たちの希望もあり、日本の
皆さんからのカンパで、今年はプリンターと掃除機を1台ずつ購入して贈呈しました。



お昼寝中の子どもたち

学校訪問と子どもたちとの交流

教育長と校長との話し

クラスノポーリエ市内にある学校を訪問しました。この学校は、チェルノブイリ20周年にベーラさんとともに来日された英語教師エレーナさんが勤めている学校で、毎年訪問して交流をしています。子どもたちとの交流の前に、地区の教育長と校長先生にお話を伺いました。二人の話しは次のような内容でした。

「若い人は大きな町に行きたがるので、先生も不足ぎみで人材不足です。クラスノポーリエは小さな街ですが、教育レベルは高いと自負しています。私たちは、クラスノポーリエのような汚染地でも、食生活やその他の様々な注意や規則を守れば、暮らしてゆけると考えています。クラスノポーリエ地区には、食品の放射能測定を行える三つの衛生ステーションがあります。地区では、森へは行かないこと、キノコ、川や湖でとれた魚、そして野生のイチゴなどは食べないことなど、生活の注意を記載した一般の人々向けのパンフを作りました。また、先生用の参考書もあり、それには放射能についての専門的なことだけでなく、日常的なアドバイス、例えばカブは皮を厚くむいて調理するとかいったことまで書いてあります。」「子どもたちには、放射能から身を守る知識を教える特別の授業があります。『生活安全』という教科です。この科目は事故前からあったのですが、事故後に放射能のことも教えるようになりました。私たち教師は子どもたちだけでなく、親にも話しをします。」「ベルラード研究所（放射能の環境測定や移動式のホールボディカウンターでの巡回測定などに取組んでいる民間団体）も定期的にクラスノポーリエを訪れ、子どもたちの体内被曝測定をしてくれています。私たちの学校や地区の教育長も、その測定データを受け取って、体内被曝の高い子どもについては家族への指導を行うなど、役立てています。体内汚染の高い子どもたちには、セシウムの腸管からの吸収を防ぎ、排泄を促す効果があると言われているアップル・ペクチンの配布を行うこともあります。」

放射能汚染地に26年間、暮らし続けざるを得なかったチェルノブイリの被災地で、放射能汚染としっかり向き合いながら、ヒバクを避け、自らの身を守る生き方を子どもたちにも住民にも教えてきた教

師たち。人員不足でも、やれることをやって、子どもたちの教育を守ってきた…というクラスノポリエの教師達の思いを感じました。一方、事故からわずか2年のフクシマの被災地では、給食の放射能測定は行われるようになり、校庭の除染などはある程度はなされましたが、子どもたちを取りまく環境には放射能汚染がまだまだ続いています。子どもたちに放射能汚染の現実と向き合うことを教えることを避け、文科省と教育委員会の指示の下、「何事もなかった」かのように「事故前と同じ生活」に戻そうとしている福島県の被災地の学校現場との違いを考えさせられました。

「ウクライナのチェルノブイリ汚染地では、普通の体育の授業を受けることができるのは、480人中14人」とのNHKによる報道が昨年され、私はそのことが気になっていたので、学校でも子どもたちの健康状態について校長先生に尋ねました。「全校生徒527人中、完全に体育の授業が受けられないのは3人だけです。健康状態に配慮した特別の授業を行うグループは16人。このグループは健康状態によって変わり、健康が回復すれば普通の授業に戻ります。ウクライナは診断の基準が違うのかもしれませんがね。」との返答でした。学校では、体育にけっこう力を入れているとのこと。体育の授業は週に3回あり、それに加えて土曜日は「健康の日」として課外活動でスポーツをするのだそうです。ちなみに、ロシア語は2回/週、ベラルーシ語は2回/週、英語は5回/週（学年は？）。来年から外国語試験（全国共通学力試験？）が新たに導入される予定で、ギムナジウムでは語学教育にも力を入れたいと考えていて、音声教材を使えるパソコンは12台あるのだが、ヘッドホンの数が足りないので支援してもらえないかとの依頼がありました。今回、日本の皆さんから預かった支援金をやりくりして購入することにし、翌日、クラスノポリエ市内の電気屋さんに校長先生と一緒に買いに行きギムナジウムに贈呈しました。

子どもたちとの交流

教室では、エレナ先生の生徒さん、8歳から10歳の子どもたち10人が交流のために集まってくれていました。子どもたちは、「日本の学校では制服があるの？」「春休み、夏休み、冬休みがあるの？何日間の休みなの？」「昨日、テレビのニュースで、日本で大きな地震があったことが報道されていました。日本では、地震の予告があるの？地震が起きたら日本の皆さんはどうしているの？」



「日本では地震や津波が多いけど、日本の人々は怖くないの？」「日本の子どもたちはベラルーシに来れますか？」と、日本のことに興味津々で次々に質問してきました。また、ビデオレターや手紙を通じて、日本の子どもたちと交流をしたいとのこと。「クラスノポリエは森や湖があってとても美しいところです。」「街には、お店や銀行、学校や幼稚園、公園もあるよ。それに農場もある。」等々、子どもたちは口々にクラスノポリエがどんなところか説明してくれて、またベラルーシの歌を歌ってくれました。その

様子をビデオに撮ってきましたので、もし日本のどこかの小中学校でクラスノポリエの子どもたちとの交流をしたいとのご希望があれば、「救援関西」までご一報下さい。

チェルノブイリ被災地の放射能汚染に関する子どもたちによる調査研究活動

放射能汚染を含む環境問題についての授業を担当しているタチアーナ・イブチェンコ先生にもお話を聞きました。クラスノポリエ周辺の放射能汚染がどう変化してきたかを知るために、これまでのモニタリング結果のデータを整理したり、食品の加工方法によるセシウム汚染の違い、また野生イチゴのセシウム汚染の経年変化を調べたりして、三人の生徒が共同で調査研究をやってレポートをまとめたそう



タチアーナ先生

です。そのレポートが高く評価されて、国際エコロジー大学のコンクールにも参加したとのこと。「子どもたちはそのような活動を通じて、汚染地での生活、食生活の注意、例えばリンゴはそのまま食べてもいいのか、洗うべきかといった、日常の注意を学んでゆきます。」とタチアーナ先生は話していました。1年生から11年生まで、全学年で、週に一回「生活安全」の課目があり、またその他に、生物や物理の授業でも放射能のことを勉強するとのこと。

病院訪問-病院長と衛生局長の話し

病院では、病院長のガーリャさん、衛生局の責任者のアレクサンドルさんと会談しました。衛生局では、クラスノポリエ地区の農作物、乳製品、土壌、薪などの放射性セシウム濃度を測定しています。また住民の体内汚染をモニタリングするためのホールボディカウンターでの測定を行っています。アレクサンドルさんの話しは次のような内容でした。

「最近では、年に1500-1700検体の放射能検査を行っていますが、10年前はもっと検体数は多かったです。汚染の高い農村部では、人口も家畜の数も減っています。森のきのこや木の実、野生の動植物は、今も放射能汚染が高い。きのこは放射能汚染レベルに応じて、採ってはダメなもの、食べるかどうかの判断は放射能を測定した上で決めねばならないものなど、三つのカテゴリーに分けています。土壌の性質によっても作物の汚染レベルが違う。いずれにしろ森のキノコの採取を完全に禁止したり管理したりすることはできないのが現状です。」

「薪そのものは今の基準値（740 ベクレル/kg）を越えるものはなかったのですが、灰は今も1万ベクレル/kgを超えているので、灰を加工したり、売ったりすることを禁止しています。」

「牛乳の汚染が一番心配です。特に個人で飼育している牛の牛乳の汚染度が高い傾向があります（牛乳の「基準値」



は 100 ベクレル/kg)。昨年、一昨年はあまり結果がよくなかったので、『国家プログラム』で汚染のない飼料を与えました。年に二回、夏と冬に 100-500 頭の牛乳を検査します。クラスノポリエ地区のデータはモギレフ州から保健省、農業省に送られ、必要に応じて対策のための資金が支出されます。測定して基準値を超えた場合、その牛のエサや水を調べます。冬は飼料のワラを調べます。」「最近、ジャガイモや肉は基準値（食品によって国民の摂取量が異なるので基準値も違う。ジャガイモ：80 ベクレル/kg、牛肉：500 ベクレル/kg、鶏・豚肉：180 ベクレル/kg）を上回るものはなくなりました。」「15 キュリー/km² 以上の地域では、今も農業は禁止されていて、いつ再開できるかわかりません。」

「商店のバターやチーズは抜き打ちでサンプル検査をします。また、生産者、加工工場での製品もチェックするので、どんな食べ物も、流通の過程で少なくとも二回のチェックが行われています。市場で売る農作物やミルクも全てチェックします。」「最近、個人で衛生センターに測定を依頼して作物などを持ち込まれることはあまり多くありません。個人で住民が測定を依頼してきた場合は、無料です。測定時間は 30 分、検出下限値は 3.7 ベクレル/kg です。」

「衛生センターでは、地域住民のホールボディカウンターによる体内セシウム測定も行っています。今年は、住民約 1 万人中、基準（年間被曝量で 1mSv、これは器械のプログラムで自動的に計算するのでアレクサンドルさんは計算法を知らないとのこと）を上回ったのは 15 人だけでした。」（注：教科書的には、体内に体重あたり 300～400 ベクレル/kg の放射性セシウムを保持している人の年間内部被曝量は 1mSv と計算される。）

アレクサンドルさんのお話をうかがって、事故後、少しずつ汚染レベルは改善してはいるものの、25 年以上を経てもなお、食物や乳製品のモニタリングが欠かせないというチェルノブイリの汚染地の現実を改めて考えさせられました。これからのフクシマの被災地でもこのような長期のモニタリングを続けることが、人々の被曝を減らし健康を守るためには、やはり必要でしょう。

ガリーナ病院長には、森林労働者の健康状態について質問してみました。福島や宮城などでも、森林の汚染が深刻で、そこで働く人々の被曝が気になりだったからです。残念ながら彼女は、住民全体のデータしか知らず、職業別のデータはわからないとのこと。全ての森で、15 キュリー/km² 以上のところは作業しないことになっているそうです。

ベラルーシの検診システムについて、ベーラさんにお聞きしました

子どもの場合

* 検診回数は、年齢ごとに下記のようになっています。

0-1 歳：毎月、小児科医が検診

1-2 歳：4 回/年

2-3 歳：2 回/年

4 歳～：1 回/年

＊ 子どもの検査項目：

血液検査（検血、生化学検査など）、尿、便、血圧など、全身の健康状態をチェックする。

歯科、眼科、耳鼻科、外科（四肢や骨格の異常等をチェック）、神経専門医のチェックも受ける。

学校では心電図、肺活量なども行う。

15歳時に婦人科検診も受ける。

甲状腺超音波検査は6歳以上に行っている。（事故後数年～10年頃まで2回／年行っていた。）

＊「管理が必要な子どもたち」の経過観察：

生後に診断された慢性疾患、心臓、肝臓疾患、小児ま

ひ、骨格、神経、眼科などの様々な疾患について、2回／年、経過を診る。

先天性心疾患でもファロー四徴症（手術が必要）以外は、経過観察し、後に健康グループに移行することもある。

貧血、肺炎なども経過観察。てんかん、小児まひは生涯、経過観察。腎臓、尿路系疾患は、疾患や病状に応じて経過観察のやり方はさまざま。無力症や胃炎などは3-5年は経過観察する。

診察の結果、様々な治療、リハビリ（通院、入院、サナトリウムでの療養など）を行う。

成人の場合

＊ 成人は、職場検診は2回／年。その他の住民は15キュリー／km²以上に住んでいた人は2回／年、それ以下では1回／年。

＊検査項目：事故後から1990年代には、血液検査項目では生化学検査とか全部やったが、今は疾患が見つかったひとのみ詳細にフォローしている。年齢別に決められた検査項目がある。血液検査は、通常は1回／年。貧血などあれば毎月でも行う。このような検査は、リスクグループを明らかにするためにも必要とのこと。

今後の支援について、ベーラさんと話し合いました

今後は、救援金をお預けするよりも、あらかじめベーラさんたちに現地で学校や各施設と相談してもらって、訪問した時に現地調達で必要な器材や物資などを購入して各施設に贈呈するという支援方法が望ましいとのこと。できればこれまで支援してきたソヌチカ幼稚園やギムナジウムだけでなく、他の学校にも支援してもらえればありがたいとのこと。次回は、ベーラさんが村部の学校（例えばシードロフ村）も含めて相談し、必要な支援をあらかじめ聞いておくこととなりました。

また、ノボ・キャンプへの参加支援を増やしてもらえるとありがたいとのこと。「一人460ドルは高いと思う。宿舎は少し古いし、カーテンも破けたりしていた。でも、子どもたちはとても楽しく喜んでい



甲状腺超音波検査を受ける子どもたち
1994年訪問時にクラスノポリエで撮影

る。」と、ベーラさんは率直な感想を言われていました。5月頃、早い目に予算と人数を連絡してほしいとのこと。学校と相談して子どもたちのリストを出してもらい、参加者を決めるそうです。

また、これまであまり支援してこなかった「成人の障害者リハビリセンター」にも継続して支援をしてほしいとのこと。身障者のいる家庭など、それぞれの家庭に必要なものを、私たちが日本から来た時に現地で購入して渡すという方法も検討することになりました。

今年の夏から2歳までベビーフードは無料となったそうです。また3歳までは薬代（薬品など一定の制限あり）が無料になったそうです。母子家庭への手当は、働いている人の家庭よりも多く150ドル／月。出産手当として、6ヶ月に補助金が出る。3歳までと、3-6歳までとそれぞれ額の違う手当が出るなど、子どもを持つ家庭への政府の配慮もなされているそうです。

入院手術の必要な子どもさんへの支援

今回、ミンスクの病院での入院治療が必要な11歳の男の子、キリル君の家族に、ベーラさんを通じて、私たちの救援資金から500ドルの支援を渡してもらいました。キリル君は、水腎症（尿管が何らかの原因で通過障害を起こし、腎臓の出口[腎盂]に尿がたまって拡張してしまう状態。長期に続くと腎機能そのものが低下してしまう。）で、年に1-2回大きな手術が必要とのこと。手術はミンスクの大きな病院で受けるのですが、その間、二週間は母親が子どもに付き添わねばならないのです。ミンスクまで往復50万ルーブル（約5,500円相当。平均的な家庭の一月の生活費の5分の1くらいに相当。）。母親の付き添いの食費5万ルーブル／日。それに薬代も一部かかるそうです。9月初めに手術のためにミンスクに行ったのですが、たまたま風邪をひいてしまって手術ができなかったのも、また改めて行かねばならないとのことでした。手術がぜひ成功して、元気にクラスノポリエに戻ってきてくれることを心から願っています。



ソームチカ幼稚園の先生方と一緒に掃除機を
買いに行き、贈呈した。

お詫びと訂正

すでにお送りしました前号（89号）の現地訪問報告の記事で、「日本生態系協会」会長の「差別発言」について記載すべきところを、「日本エコロジー協会」と誤って記載しておりました。お詫びして訂正させていただきます。申し訳ありませんでした。また、その他、細かい修正と加筆を加えたものを、近日中にホームページにアップする予定です。あわせてご参照下さいませ。よろしくお願いします。（振津）

さよなら原発3・10関西2万人行動

大雨の中 叫びました

大飯原発即時停止！ 再稼働新增設原発輸出阻止！

原発延命の電気料金値上げ反対！

フクシマから2年、3・11前日の2013年3月10日は、大阪の中之島公園の「さよなら原発関西2万人行動」で声を結集しました。

10日の朝は、寒さゆるく、日差しが新芽に榮えてさわやかな日和でした。(朝は)デモは14時10分からですが、朝から音楽パフォーマンスが次々行われ、中心部の水上ステージは若い人が聞き入っていました。11時くらいになると人の数が増えてきて、東端の女神像付近はだんだん賑やかになり、各団体がアピールするビラをまいたり署名を集めたりしはじめました。私たちも、4月の「チェルノブイリ27周年」の集会のビラを配ろうとしましたが、いかんせん、いつものようにスタッフ不足。一人はアピールの進行係・一人は集会主催者のカンパ係・一人は5分間アピールの係で、初めて参加する人のために旗を持って立っておくメンバーも確保しなアカんし、の状態でした。そこへ、「ゴーゴーわくわくキャンプ」の伊達君と大橋君が手伝いに来てくれ大助かり。手分けしてビラをまきました。

関西は事故の風化が進んでいるとよく言われますが、剣先公園のほうは労働組合・中央は親子連れや若者・女神像付近は市民団体等がそれぞれ集まり、思い思いのプラカードやアピール衣装を準備して、広がりを感じさせました。いつもチェルノブイリの集まりに来て下さる、「プクプク」や「スイム」のフクシマの子どもたちの保養支援をされている皆さんも障がいのある人も車いすにカッパスタイルで参加。意気軒昂でした。2年も経ったのにフクシマの状況は改善せず、事故がなかったかのような「再稼働」「新增設」「原発輸出」???そうよ、おかしいとみんな思っていると、元気をもらいました。

昼前に突風。ビラと横断幕が風に舞い上がり、・・・あっという間に天気が変わりました。雨がぱらつき、そのうち大雨。しかしみんな動きません。傘の花を前にして、フクシマから武藤類子さんのアピールがありました。進まない支援、フクシマと一言と言っても一人ひとりの事情はそれぞれ。100人いれば100人の苦しみ・・・炭は着火時、燃え上がる時より、消えたかに見える「熾火」の時が一番温度が高い・・・と、静かな声で、住民の怒りを熾火にたとえて話されました。

雨の中のデモは参加者も大変だけど、道行く人々も少なくして少し残念でした。濡れると色がおちる横断幕を出したり入れたり。御堂筋コースは心斎橋や難波の道行く人にアピールしやすいのですが、去年に比べて反応がありませんでした。「マスコミの原発についての取り上げ方も変わったよね」「原発、原発言って景気に陰りがでると言われたわ」・・・隊列の皆さんの意見です。やっぱり逆風かな?しかしここからが正念場。フクシマを起こしておいて何の咎めも無く、エネルギー政策で多くの原発「ゼロ」の声を無視し、そのまま動かすなんて許したら、日本に世界に未来はありません。

天気と大雨、元氣と逆風、両方もらいました。

ファイト！ ゆみ

知ること・学ぶことの大切さを教えて下さった橋本さん

橋本さんと僕の出会いは、約9年前「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」（以下、チェル関）に僕が顔を出すようになってからのように思います。その頃、チェル関の会議にあわせて「核とヒバクの半世紀」をテーマに勉強会を重ねようと若者らで集まる機会が設けられていました。これに僕も参加していました。その際の講師および助言役として橋本さんが来てくださっていました。集まりはその後、「クリーリア」という若者グループとなり、未来の世代でも学び続けられるように、自分たちが学んだことをまとめて冊子を作成することになりました。冊子は、2006年に2部発行されました。50周年を迎えたビキニ事件を取り上げた『ビキニ水爆実験と向きあう 10 の眼』、チェル関代表の山科さんの話を中心とした『ヒバク 60 周年冊子 長崎被爆者の証言 山科和子の軌跡—オリヅルをたずさえて—』です。

そのおおよその作業は、それぞれが各々の役割分担したテーマで文献を探したり話を聞きに行ったりし、その内容を理解するためにまた調査してものを書く、それらを集め一つの読み物にまとめることでした。当時の僕にとってそれは大変な作業でした。分からないことが多すぎ、作業はたちまち困難を極めたためです。だが、そこに橋本さんが的確な文献を紹介してくださり、僕の書いた未熟な文章をみる、ものを書く上での的確な問題意識の助言・提案などをしてくださり、なんとか成し遂げることが出来ました。

その後、クリーリアの活動は徐々に無くなっていきましたが、橋本さんはヒバクに関する情報発信をし続けてくださり、継続して学ぶ機会を与えて下さりました。

今、僕がこうして強い気持ちで NO MORE HIBAKUSYA! といえるのも、橋本さんから多くのことを学ぶことが出来たからだと思います。橋本さんから僕は、知ること・学ぶことの尊さ、重大さを教わりました。

ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。

長澤 智行



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2013.2.12~2013.3.27

曾我日出夫 小林まゆみ 円居敬子 畑章夫 大津貞美 向井千晃 増田京子 中山一郎 田村和子
即得寺 藤田達 谷岡文香 鹿間佳子 田中章子 林律子 宮越吉郎 大久保利子 森本良子 山田耕
作 馬庭京子 尾上照子 久保良夫 久保きよ子 猪又雅子

(順不同・敬称略)

[illegible]

***「福島原発と被曝労働」の出版記念集会**

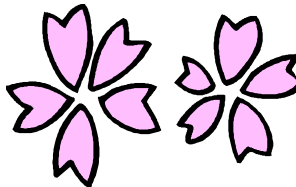
～原発被曝労働の危険を考える～

日時:4月27日(土) 午後1時30分～

場所:毎日インテシオ 301号室

主催：ヒバク反対キャンペーン

連絡先:090-9719-8754(寺西)



ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752